



【2016年10月発行・会報第18号】

皆さん、こんにちは。

今回もフィリピンセブ島から現地代表濱野が2016年10月の会報をお届けいたします。



今、この会報の原稿を起稿しておりますのは、10月中旬に差し掛かる時期ですが、この時期、フィリピンでは、義務教育対象となります、日本で言う所の幼稚園の年長組から小学校、中学校、高校は、1年4学期の2学期終了間際、大学では前期の終わり掛けとなり、丁度、1学年の折り返しのタイミングになります。

また、10月20日過ぎ頃からは、'中間休み'があり、最近、日本でも盛んになりつつある、ハロウィーンで中間休みが締めくくりとなります。ハロウィーンと言うのは、元々、キリスト教圏で、死者が地上に戻って来る日と言う位置付けであり、ここフィリピンでは、日本のお盆宜しく、その期間に、地方から都会へ出て来た人々が帰省し、お墓参りをする風習があります。

さて、私は、仕事の都合上、ここフィリピンセブ島に常駐しているので、当然の事ながら、日本の情報には疎くて、日本の情報を取るソースは、NHKの衛星放送か、インターネット上の情報に限られてしまうのですが、それでも、最近、感じるのは、良くも悪くも、フィリピンの情報が例えば1年前に比べて、かなりの頻度で報道されるようになってきていると言う事です。

その理由は、今年6月30日をもって就任したロドリゴ・ドテルテ大統領の過激な発言と、薬物取締における超法規的措置(殺人)の容認(指示)であると理解しています。

1. フィリピンの現況

1) 現政権についてフィリピン人たちの受け止め方

さて、ここからの内容につきましては、若干、前回の会報の内容と重複する事に成る事を先ず御容赦頂きたく思います。

先ず、言えます事には、上記の事実は、この新大統領が選挙公約に掲げたものをそのまま実行しているに過ぎません。そして、これは最新の NGO 調査による国民の大統領支持率にも忠実に反映されており、未だに 80%を超えております。



それを裏付けるかのように、毎日、彼の動向がテレビラジオから伝えられ、人が集まる場所に設置されたテレビの前には、彼の発言を食い入るように見つめる人々の姿が良く見られます。

また、私は、ここで生活するに当たり、公私ともにフィリピン人たちとの交流が日常のモノとなっていて、プルメリア奨学生、そして、そのご家族（ご父兄）の皆さま、工場団地の従業員と時に、フィリピンの現状、現大統領のアリカタについて話題になる事もしばしばありますが、私の知る範囲において、現大統領を悪く言う人は皆無です。

従って、先に挙げた大統領の支持率 80%超という数字にはカナリの信憑性があると判断出来ます。ただ、当然、フィリピンの現政権の中にも、反ドテルテ勢力があり、こうした勢力が何かとドテルテ大統領の上げ足取りの動きをしている状況があるようです。

しかしながら、日本の皆さまの立場に立って物事を見ますと、そもそも、そうした超法規的殺人を含む選挙公約を掲げた一国の代表者候補が当選し、当選の暁に日常的に実行されている事はあり得ないとなるでしょう。一部の報道においてドテルテ氏を指して、‘フィリピンのトランプ’として言い方をされる事があり、かのトランプ氏に対しては、トランプ氏の出身政党である共和党内部からすらも批判的な動きもある訳ですが...

また、ドテルテ氏のアメリカへ対する過激な発言も良く取り上げられますが、事実として、アメリカによる植民地支配をされた際にフィリピンが被った痛みたるや筆舌に尽くし難いものがあり、ドテルテ氏は、そこを踏まえた上で様々な発言をしているのは、私も一定の理解はしております。

要は、第2次大戦での戦勝国であるアメリカのフィリピンでの悪行は、一般的には知らされておらず、そこを知らない限りは、ドテルテ氏の発言は理解不能なのです。(今はインターネットという便利なツールがあり、日本語でも英語でも検索・翻訳できますので、興味のある方は御調べ下さい)



2) トランプ氏と一緒にするな...

こうした中で、私の交流するフィリピン人たちから異口同音に良く聞かれるのは、“ドテルテ大統領とトランプ候補を一緒にしないでくれ。それは、我が国の代表に対する侮辱である”としたコメントです。

確かに、その‘過激度’においては両名、比肩するどころか、ドテルテ大統領の方が既に実行しているモノも含めて、その上を行っているかも知れませんが、大きく違うのは、トランプ氏の発言は、アメリカでは実は最早少数派となってしまった白人層の本音部分（我儘と言っても良いかも知れませんが）を代弁しているに過ぎませんが、ドテルテ氏は、フィリピンの大多数を占める庶民層の、これまで言葉に出来なかった心の声を代弁しているところでしょう。

3) 超法規的とは言うけれど...

実は私、8月頃に日本人の知り合いが、ある種の誤認逮捕をされ、その方を救出する為に警察とやり取りをした上に、セブの検察庁にまで出頭した事があります。(詳細をここで述べるのは避けませんがご興味があります方々には、ブログに詳細を述べておりますのでご参照ください)

その際に目撃した検察庁内部の様子たるや、惨憺たるものでした...

要は検察での取り調べを受ける者たちが行列を作っており、私も、容疑者とされた日本人の方と共に、その場に居たのですが、そこでは単なる事情聴取の為に、半日以上待たされ、それでも飽き足らず、更に翌日まで持ち越しされた状態でした。

これまでのところ、分かっているだけで、ドテルテ氏の主導する‘麻薬戦争’の為に 3,000 人以上の容疑者が殺され、殺される事を恐れて投降して来た容疑者は70万人にも及ぶようですが、その所為で、セブの検察庁は、先に私が述べた通りの状態になり、更には、全国各地の刑務所の収容が平均で定員の6倍を超え、最早、パンク状態になっているのが現状のようです。

そんな中で、一部の人権擁護者たちが言うように、そうした容疑者たちの人権、殊に裁判を受ける権利を尊重した場合、どんな事になるのかは火を見るよりも明らかと言わざるを得ません。要は、ここでの状況を先進国のスタンダードで測る事は不可能であり、近代の法的プロセスを経て問題を解決するという事は、恐らくは机上の空論ですら成り立たない状態であるというのが、ここフィリピンの現状なのです。



3) 近代法治国家という誤解

この事は前の会報でも述べたと思いますが、上記の状況からも垣間見えるようにフィリピンと言う国を、‘近代法治国家’と捉える事が、そもそもの誤解の元だと考えられます。

…が、今の状況を見るに、恐らく、民意は反映されて、こうしたレベルの中でも‘特殊な形’で民主化は達成されているが、そもそも法治国家ではない…これが、この国の状況を一番正しく説明したところではないかと思えます。

要は、今の状況から見るにドテルテ氏は、フィリピン人にとって、カリスマ的なリーダーであり、彼らの意識レベルは、恐らくは中世レベルの域を出ていないと見えます。文化的な背景からも言えるのですが、ここフィリピンは、その国民の約90%がクリスチャン、その中でも伝統宗教であるカトリック教が80%以上を占める、実質キリスト教国である事から、‘それ’は避けられず、中世ヨーロッパ、ルネッサンス以前のメンタリティを継承している事は以前から何度も述べて来たと思います。



そもそも、キリスト教の開祖である、イエス・キリストを指して、日本語訳で‘主’と言いますが、これは英語では、Lord であり、正しく、絶対君主、領主の事を指している訳です。特に伝統宗教であるカトリックには、この中世的な要素が根強いので、それは、皮肉な事に民主（つまり、庶‘民’が主）というコンセプトとは相反するものなのです。

よって、今の状況を見ますと、フィリピン人たちの精神的な‘主’（敢えてアルジと読みます）は、キリストであっても、実効的な（？）アルジは、ドテルテ氏…このように見えます。

実は、ここフィリピンで、30 数年前まで権勢をふるったマルコス独裁体制は、こうした状況・メンタリティから生み出されたモノであり、彼ら一族が権力を強化しすぎた事を懸念した庶民とは違う何者かが、教会を味方につけ、庶民を扇動して、権力の座から追った…こうした見方がありますが、私は、正に‘それ’だと思います。



ところが、マルコス後の‘見かけだけの民主主義’には何ら実効力は無く、見かけの指標でも、この国フィリピンは東南アジアの周辺諸国にドンドン後れを取って行きました。更に言えば、その中身を見ますと、その間に格差を乗り越えて落差が激しくなり、庶民層の生活は、ほんの一部、幸運にも中流層に上がった人々を除き、悪化の一途です。

つまりは、30 数年の空白の時を経て、元通りになった…今はそれに近い状況に見えます。要は、近代民主主義はこの国には未だ早すぎるのかも知れず行くべき所に行き付いたのかも知れないのです。

要は、今後、これまで潜在して見え辛かった、ありのままの姿を現して、問題を顕在化させた後で、何処まで国家の機能不全を解消できるかです。フィリピンの内情に精通した人の中には、ドテルテ氏を指して、‘フィリピンの織田信長’と言う人もいますが、私には、言い得て妙のような気がします。今後の動向に注視して行きたいと思います。

3. 平成 27 年度決算から

一昨年度の決算は、大幅の赤字であり、今後の活動継続すら危ぶまれる状態にありましたが、昨年度は、未だ見かけは赤字ですが、一応、円ペソ交換の差損他を考慮した時、これは誤差の範囲と言え、その実、ほぼ、タイの状態にまで回復しつつあります。

これは、経費の節減に継続的に取り組んだ事、それに、今年初めから円が高めに振れ始め、期末では 1 ペソ=2.11 円程度までの値上がりした事が大きな要因となっております。

…が、懸念材料として、上記ドテルテ氏の過激な発言がキッカケとなって、今、ペソの交換レートが対ドルで非常に落ち込んでおり、結果として輸入品の価格が高騰しつつあるので、今年度はともかく、来年度には、この動向を注視する必要があると思われます。



4. 今後のフィリピンとプルメリアの活動

過去 10 年を振り返って見ますと、ここフィリピンの状況は格段に変わり、貧困層の賃金の上昇は恐らく 40%前後であったのが、物価そのものは、ほぼ倍になりました。

それが第 2 章で述べました格差を超える落差の拡大を生んだ訳ですが、一つ言えるのは、経済発展と言うもの、恐らく嘗ての日本もそうであったように、‘上’が富み、それが下に伝搬されて行くと言う順序を踏むのが普通で有る為、今後はドテルテ大統領の登場によって、その選挙公約から読み取れる内容からしても、下層への富の分配が始まってゆくのではないかと一縷の希望があります。恐らくは庶民の希望もそこにあり、その下地作りの為に流血の事態も止む無しと、皆が、今の事態を固唾をのんで見守っているのだと思います。

何れにしましても、プルメリアの基本的デザインは、私が、ここで前身の NGO の活動に携わった 17 年前と、全く変わっておらず、当時は、日本とフィリピンの経済格差（即ち貨幣価値の圧倒的な違い）を利用して、この地セブ・フィリピンに友好の種を蒔こう…とした形が非常に有効であったのです。

ところが、その間に、日本の経済は停滞どころか後退し、フィリピンの経済は全体として見れば、確実に成長しました。そして、この先も、これまで 10 年と同じペースとは行かないまでも、確実に成長して行く事でしょう。（仮に同じような形で進むのであれば、物価他のレベルでは 10 年も経たない内に日本とフィリピンは同じレベルに並んでしまいます）

実は、そこが、プルメリアの活動を縮小方向に持って行かざるを得ない最大の理由で、何とか現状に合わせた対応は出来るかも知れないが、今後の成長とか、日本経済の進み行く方向が非常に不透明な状態においては、どう手を打つのが大変に難しく拡大と言う方向性は非常に非現実的なものとなります。



また、ドテルテ大統領は昔の日本宜しく、‘所得倍増計画’なるものを打ち出しております。その手始めとして、来年度を目標に、労働者の1日の最低賃金を全国一律125ペソ（率にして30%）上乘せるとした事を宣言しております。

その件については、政府関係者の中にも‘不可能である’と反発している向きもありますが、本来、麻薬撲滅と治安の安定は、外資の投資を促す為とした目的だったにも関わらず、この急激な賃金の引き上げは、明らかな逆効果になります。

話の焦点がずれてしまいましたが、何れにしろ、今、フィリピンは賃金の上昇、物価の上昇というのがトレンドになっている事は間違いなく、そうした動きの中で、我々のような小さく草の根的なNGOの役割は縮小または終焉を余儀なくされていくのかも知れません。



私自身も10年経てば還暦を迎えます。その辺りも考え合わせながら、しかし、可能な限り、今、関わっている子どもたちが何とか立ち行けるよう、頑張りたいと思いますので、皆さまの変わらぬご支援を宜しくお願いいたします。

現地NGO法人 Plumeria Cebu Educational Association Inc.

Unit 4, 918 Freedom St., Peace Valley, Lahug, Cebu City, Cebu, 6000, Philippines

TEL/FAX 63 32 417 2302

現地セブ市 Mobile Phone # 0917 319 3669 Skype In # 050-5534-7425 (From Japan Only)

担当：濱野(はまの)

日本側事務局は個人の事務所をお借りしてボランティアで里親代表が対応している為に不在の事も多いので、メールにてお問い合わせを頂くか、日本国内から現地事務局へ国内通話料だけで電話出来る下記の転送電話をお使い下さい。050-5534-7425 担当：はまの（スカイプイン転送サービス）

【 日本側・NPOプルメリア事務局 】

〒502-0817 岐阜県岐阜市長良福光 2463-1 サンジェムビル

NPOプルメリア本部事務局 担当:中島吉徳